

マチノチカラ

長洲の輝く人にクローズアップ vol 9

食卓に安心・安全、おいしさを届けたい
それが農業をしている自分の役目

「トマトづくりの職人になりたい」
長洲町の農業の未来を支える若手就農者

高松 幸喜さん

38歳 東荒神



PROFILE

たかまつ・こうき

97年に帰省後、就農。JAたまな中央集荷センタートマト部会に所属。01年青年農業士に認定され、05年から2年間、同部会青年副部長、同岱明支部役員などを歴任。現在は妻、母、パート雇用2人とともにトマト73aを栽培している。東荒神区在住。38歳。

鮮やかに色付くトマトが、収穫のピークを迎えている。「きれいに実っているのが、何よりうれしい」と高松さんは言葉を弾ませる。

ミニトマトに対して普通サイズは「丸トマト」と呼ばれ、町で栽培・出荷しているのは高松さんただ一人。所属する「JAたまな」のトマト部会は、県内はもとより、全国的にも評価が高く、関西や関東、中には北海道まで出荷されるものもあるという。

千葉県の大学を卒業後、種苗会社に就職。就農のきっかけは、「農家の人と関わるうちに自分でもやってみたいと思った」と振り返る。

25歳の時、帰省。1年間、熊本市のトマト農家で修行をする傍ら、土地を見つけたり、中古のビニールハウスを調達したりと、一から農業を始める準備を重ねた。

98年6月、宮崎区にビニールハウスを移築、8月に苗を定植した。「不安もありましたが、とにかく無我夢中でしたね」と当時を振り返る。

やっと収穫が安定したのは4、

5年目から。「収穫の喜びはもちろんですが、これまで自分がやってきたことは間違っていないかったという自信にもつながりましたね」と胸を張る。

肥料の量など細かいデータを積み上げ、トマトにとって最適な状態を常に模索。勉強会などにも積極的に参加している。熱心な姿勢や取り組みは2007年、県農業コンクールで評価され、妻美樹さんとともに新人王部門で特別賞を受賞した。最近では若手農業者としても注目を集め、講演や取材を引き受けることもしばしば。忙しさの中でも、表情からは充実した日々がうかがえる。

「トマトづくりの職人になりたい」と高松さん。「安全で安心、そしておいしい野菜を食卓に届けることが、私たち農家の役目」と思いは熱い。

「農業は、終わりがありません。だから飽きない。毎日が勉強です。好きじゃないとやれない仕事です。ね」とほほ笑む。穏やか笑顔と飽くなき挑戦は、長洲町の農業の未来を照らしている。